1970.6.25 明治大学新聞

学生諸君へ

一教員としてロック・アウトの事態に考えを表明する

法学部　福井正雄

「…遺憾なのは警官隊の態度である。柏村長官は単に追い返しただけと弁明しているがテレビに映った警官隊の姿は明かにコン棒を振り回す暴徒だった。警察はどのように挑発されても、あくまでも秩序を守るものとしての節度を忘れてはならない。にもかかわらず武器をもたない学生に凶器をもった暴徒となって襲いかかった。流血の惨事も当然だろう。警察当局の反省を求めてやまない……」

（昭和35・6・16毎日新聞）

十年前、明大佐々木総長はこのような談話を発表して、警察当局に抗議した。

当時、学内は連日教職員学生の討論の場となり、私服警察官の侵入を阻止するため、自発的検問体制もとられたと伝聞する。

十年を経た今日、安保は日本国民総生産第二位の大国に押し上げたいっぽう、アジアの各地において、その地域の人々に限りない悲惨な運命を強いている。この安保の真価を問い、本質をただし、国民全般に対して警鐘を鳴らすことは大学当局のいわゆる「批判と良識の府」としての機能を発揮するためという立場にたっても、現下における急務中の急務であるといわなければならない。

今日のロックアウト措置は、学生諸君から集会の場を全面的に奪い、また教職員と学生との意見交流を致命的に阻むものであることは言をまたない。その理由にいう「学内外における他大学を含む一部学生の暴力行為や業務妨害が頻発している事態」が、現下の大学行しなければならないほどに顕在化しているとは到底考えられない。この意味において、私は今回の措置にたいして強い不満を表明するものである。私は授業において「この授業を単に単位を楽に取るためのものとはせずに諸君自身の目的意識を実現するための場として構築し直す意気を持て」といい続けてきた。今日この一方的なロックアウトに遇り、その種の言葉が、いかにも空しく響きをもつように感ぜられるのである。しかしながら、なお春秋に富む学生諸君において諦めということは許されない。諸君が今後一層の闘志をもって諸君の意識により、諸君の活路を見出してゆかれることを切望するとともに、私もまた諸君と一層密接に連帯し大学の内外において自己の運動を展開してゆくことを約束するものである。

七〇年六月十八日